

生活

名刺の肩書

私の名刺に肩書はなくなった。年齢と共に名刺そのものを使う機会も少なくなっただが、初めて肩書のない名刺を持った時は、正直のところ社会から外れたようで、少々寂しく思ったものであった。

しかし、時間の経過は、有り難くも理屈抜きでこれが本来の自分なのだと思わせてくれた。かつて現役ときは年間二百枚の名刺が足りなくなった時もあった。頂く名刺にお返しをしないわけにはいかなかったからである。

名刺には、それぞれに工夫や意匠が施されていて、感心させられる。多色刷りが主流で、本人の顔が印刷されたものも多くある。名刺の肩書には、担当責任者、係長、主任、課長、部長、取締役常務、取締役専務、社長、会長、相談役、顧問、等などがあるが、私にはこれらの役職は余り意味を持たなかった。私は肩書きでその人の人柄を判断したりしなかったからである。性格は多少遺伝的な部分が残るにしても、人柄（パーソナリティー）は経験が作り、その両方が作り上げたものを人格キャラクターと規定していたからである。

ところで、人間社会は、自分がどこかに帰属しているという意識が必要なもののようである。それによって何となく安心感が生まれるからかも知れない。考えてみると名刺という紙片は、相手への自己紹介と自分自身に対する安心確認なのかも知れないのだ。「たかが名刺されど名刺」は相手に対して詳しい証明もせず、善意や好意の保障もしていないのに、頂いた側は名刺を無下^{むげ}に捨てることはしない。再び逢うことはないと言ひ聞かせつつも、つまるところ机の引き出しに入れることになる。この不思議な紙片の持つ力には驚かされるばかりである。

ところで、私の手元が変わった数葉の名刺がある。表裏にびっしりと肩書きが印刷されていて、よく見るとその肩書きは、いずれも「元」という字が頭部に付いているのである。「元」は何の意味も持たないことは説明するまでもない。

私は名刺を使わなくなってから身も心も軽くなり、春のうららかな陽気に上着を一枚脱いだような気分で過ごしている。先人の云う「尾を塗中^{とちゅう}に引く」ことの快適さに気づいたからである。人間は、この世を離れるときには、誕生の時と同じように無一物。名刺一枚さえ持つて行くことはできない。そんなことをしたら閻魔様に叱ら

れるどころか笑われるだろう。だからといって、今、何をしてもいいことにはならない。今を確かに生きていけば名刺は必要ない。人は誰でも、それぞれの価値観で生きることができ、それぞれの人生があっても良いはずである。ただし、そこには「十指、十目」を伴った重い責任も伴う。九百九十九回の成功も一度の失敗で無に帰することがあることは珍しいことではない。人として誠実に生きること。初対面の人にも敬意や麗しい精神をぶれずに示せること。これこそが多少永く生きた達人の「肩書き」ではないかと勝手に思っている。

ところで、「アドルフ・ヒットラー」と「マザー・テレサ」が「善・悪の比重」としてよく例示されることがある。この答えの重さは名刺の肩書きなどでは解決の糸口にもならないし、神ならぬ人間がこれを一方的に裁くことも出来ない。しかし、現在の世界中の殆んどの人々はマザー・テレサの生き方を支持し、ヒットラーを歴史的悪逆非道の人間として非難する。つまり、強いて論理的な答えを求めれば、どちらも人間なのであるから両者は絶対的な価値を持つてこの世に登場していることになる。だから、この両者に共通する絶対的な価値は等価値としか言いようがない。従って一方に旗を揚げるとは難しくなる。善は不善を前提にして成り立ち、不善は善との相

対から生まれる。しかもこの相対は人間がその時代や事情や都合によって選択するものである。(この場合「中庸」は方法論として捉えて絶対善とは見なさない)すると、善悪はますます混迷する。しかし、価値にはもう一つ相対的(社会的)価値というものが存在する。自分の利害や功名心などによって甲と乙を比較し利害で行動することである。現実には、この価値が人間社会を形成し動かしていると言っても過言ではない。相対価値では、だれが考えてもマザー・テレサに軍配を高く上げる。だが、我々は最終的には、人間の絶対価値を優先して生きていかなければならないのだろう。新聞やテレビでのニュースは希少な事件であるから見出しになるのである。元何某の名刺に驚くことなく、絶対価値を信じて己の判断を間違いないように生きて行くしかない。

子どもは何よりの証人である。「私はあなたの子に産まれて来てよかった」は、「肩書き」を百並べても、この一言には敵わない。これこそが人として、親として「至高の肩書き」だと信じてたい。

これからは、身軽に生きて行こうと考えてはいるが、「名前」だけの名刺は一枚、あの世へも持っていきたいと思っている。あの世で両親や兄弟、友人を捜すときに便利なように・・・